

「今鏡」の語彙論的一考察

竹原 由美子

序論 (省略)

本論

第一章 全体の語彙

第一節 言語量について

「今鏡」に使われている自立語数は三七八八二語である。まず、作品の大きさは、言語量によってわかるが、表1に自立語延べ語数の他作品との比較を示した。土佐日記は、今鏡の百に対して九・二、竹取物語一三・五でかなり低い値を示し枕草子は八六・八となった。同じ歴史物語の大鏡は七七・一、増鏡は九一・三でほぼ同じ大きさである。そして源氏物語は最も高い数値となり約五倍の大きさである。このように今鏡の量としての大きさは、源氏物語は別格としてかなり大きい作品と言える。次に異なり語数による比較を表2に示した。すると延べ語数の比より高くなっているが、やはり低い数値を示している。一方、延べ語数では今鏡より小さい値を示した増鏡が一二六・一となり高い数値になっていること、また五倍の大きさだった源氏物語が

〈表1. 自立語延べ語数比較表〉

作品名	延べ語数	比較	備考
今鏡	37,882	100.00	
大鏡	29,212	77.11	宮島氏の調査による
増鏡	34,608	91.36	中岡氏の調査による
土佐日記	3,496	9.23	宮島氏の調査による
竹取物語	5,124	13.53	"
更級日記	7,243	19.12	"
紫式部日記	8,737	23.06	"
蜻蛉日記	22,398	59.13	"
枕草子	32,906	86.86	"
源氏物語	207,808	548.57	"

〈表3. 自立語使用率〉

作品名	使用率
今鏡	6.39
大鏡	6.06
増鏡	4.63
土佐日記	3.60
竹取物語	3.91
更級日記	3.55
紫式部日記	3.54
蜻蛉日記	6.23
枕草子	6.27
源氏物語	18.19

〈表2. 自立語異なり語数比較表〉

作品名	異なり語数	比較
今鏡	5,927	100.00
大鏡	4,819	81.31
増鏡	7,476	126.13
土佐日記	984	16.60
竹取物語	1,311	22.12
更級日記	1,950	32.90
紫式部日記	2,468	41.64
蜻蛉日記	3,598	60.71
枕草子	5,247	88.53
源氏物語	11,423	192.73

一九二・七と著しく低い数値になったことが注目される。そこで自立語の平均使用度数（以下使用率とする）をみてみると表3の通りとなった。今鏡の使用率は六・三九で、大鏡、枕草子とほぼ同数値を示したが、増鏡は四・六三で低い数値である。最も高い率を示すのは源氏物語の一八・一九で、最も低い率を示すのは紫式部日記の三・五四であ

る。紫式部日記が低い率となるのは作品の量が小さいからであろう。このように考えると、歴史的物語のなかでひとつ低い率を出した増鏡は、異なり語数の大きい作品と言え、今鏡は異なり語数と延べ語数の比としてはほぼ平均的な作品と言えよう。

第二節 異なり語数から見た性格

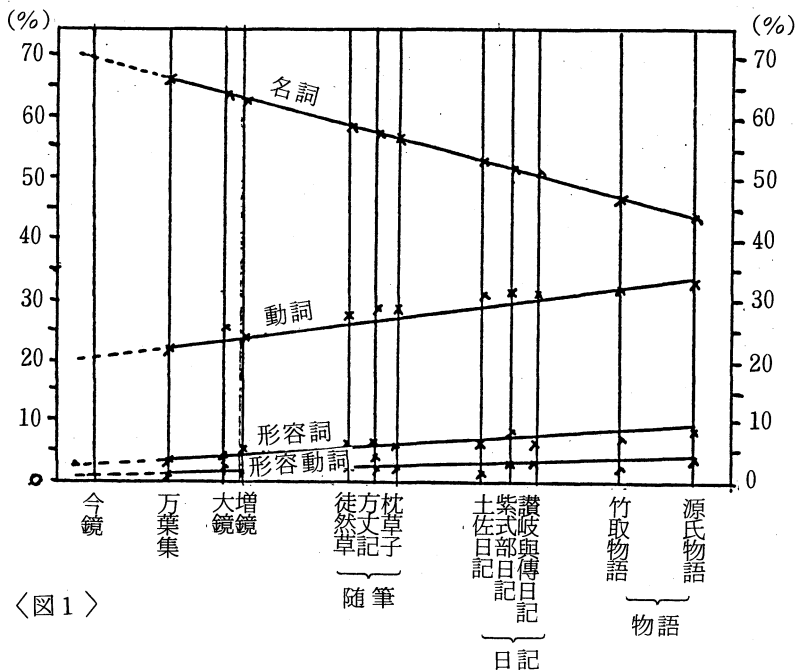
次に今鏡の全語彙を異なり語数からみると自立語数五九六六語となっている。これを品詞別に分類して他作品と比較したのが表4である。今鏡は、名詞の比率が六九・五％と最も高く、次いで動詞の二一・八％と続き、この二品詞を合わせるとその割合は約九割を占める数値となる。表4による、いづれの作品も名詞が他の品詞に比べて高い数値を出していることが伺えるが、特に今鏡は六九％と最も高く、大鏡は六四％、増鏡は六三％と六割を越えており他作品と比較し非常に高い。しかし、反対に動詞の比率は低い値を示し、今鏡が二一％大鏡が二六％、増鏡が二四％と他の作品より低い数値である。一般に名詞の比率が高ければ要約的文章、逆に名詞の比率が低く、動詞・形容詞の比率が高ければ描写的文章であるといわれているが、その点からみると今鏡、大鏡、増鏡は要約的な文章といえよう。

具体的にみるために大野晋氏が調査された「基本語彙に関する二三の研究」の相関表に組み込んで今鏡がどのような位置にあるか見てみた(図1)。鏡物3作品について見ると、大鏡及び増鏡の二作品は近い位置にあり、万葉集と随筆グループの中間に位置し、四つのグループのいづ

〈表4. 異なり語数 百分比〉

() 内は%・形容詞カリ活用は別語

	万葉	土佐	竹取	枕草	源氏	紫	讃岐	方丈	徒然	蜻蛉	更級	大鏡	増鏡	今鏡
名詞	4660 (66.5)	526 (53.0)	717 (47.4)	3048 (55.6)	6501 (44.3)	1433 (52.2)	982 (50.8)	652 (50.5)	2836 (58.6)	1899 (47.7)	1055 (49.5)	3082 (64.0)	4720 (63.2)	4144 (69.5)
形動	75 (1.1)	12 (1.2)	45 (3.0)	215 (3.9)	683 (4.6)	117 (4.3)	65 (3.4)	27 (2.3)	131 (2.7)	166 (4.2)	80 (3.8)	143 (3.0)	202 (2.7)	118 (2.0)
形容	276 (3.9)	66 (6.6)	105 (6.9)	349 (6.4)	1120 (7.7)	222 (8.1)	125 (6.5)	66 (5.8)	285 (5.9)	318 (8.0)	163 (7.6)	206 (4.3)	440 (5.9)	257 (4.3)
動詞	1515 (22.0)	326 (32.7)	552 (36.5)	1620 (29.5)	5554 (37.8)	874 (31.9)	633 (32.8)	344 (29.5)	1380 (28.5)	1363 (34.3)	717 (33.8)	1242 (25.8)	1797 (24.0)	1299 (21.8)
その他	452 (6.5)	65 (6.5)	91 (6.2)	252 (4.6)	820 (5.6)	96 (3.5)	120 (6.5)	64 (5.6)	210 (4.3)	231 (5.8)	109 (5.1)	146 (2.9)	317 (4.2)	148 (2.5)
計	7008	998	1513	5481	14688	2742	1931	1153	4842	3977	2124	4819	7479	5966
備考	大野晋氏の調査									伊牟田氏の調査		宮島達夫氏の調査	中岡成子氏の調査	



〈図1〉

〈表5. 品詞別延べ語数及び使用率〉

	名詞	動詞	形容	形動	その他	計
延べ語数	18836	15013	1788	555	1690	37882
%	49.72	39.63	4.72	1.47	4.46	100.0
使用率	4.55	11.56	8.20	4.70	11.42	6.39

れにも属していない。また今鏡は万葉集より左側に位置し、特異な値を示している。その理由としては今鏡には「いつ、どこで、誰が、なぜ、どうした」という文の骨組みの要素が多いということがあげられる。大野晋氏の説明に「万葉集は判断、叙述の仕方が単純であり、物語の中でも源氏物語などは描写、叙述に精細を極めていゝ」とあるが、今鏡もまた判断や叙述の仕方が単純であり、逆に素材の量が多いといえる。歴史物語は時の流れにそってその間の出来事を「いつ、どこで、どうした」ということを明確にしながら物語る必要があるため、素材が多くなり叙述の仕方が単純になるのは当然のことといえるだろう。

第三節 延べ語数

今鏡の延べ語数の品詞別語数比率及び各品詞の使用率を示したのが表5である。これによると、やはり名詞の比率が四九・七%と最も高く次いで動詞の三九・六%となっている。また、使用率をみると、動詞が一・五と高い数値であり、最も

〈表 6. 品詞別平均使用度数比較表〉

	土佐	竹取	更級	紫	蜻蛉	落窪	大鏡	枕	源氏	増鏡	今鏡
名詞	2.7	4.0	3.5	3.7	5.4	6.3	5.0	5.2	17.8	3.8	4.6
動詞	4.0	3.9	3.6	2.9	6.2	8.9	7.0	5.9	13.4	6.0	11.6
形容詞	3.2	3.4	4.7	4.5	2.4	8.8	8.2	15.2	27.3	6.0	8.2
形動詞	2.0	1.7	2.7	2.6	3.8	5.0	4.1	4.2	15.4	4.4	4.7
副詞	3.8	4.7	5.1	6.6	16.1		16.2	21.8	78.0		12.9
その他	11.2	15.6	12.2	7.5	16.1	14.2	30.6	12.7	65.3	7.6	4.5
全体	3.6	3.9	3.7	3.5	6.2	7.9	6.1	6.3	18.2	4.6	6.4

使用率の低いのが名詞の四五であるが、これは一、二度しか使用されていない語が大半を占めているからである。次にこの数値を他の作品と比較してみた(表6)。表6では、全体の使用率は源氏物語が一・二と最も高く、次いで落窪物語の七・九、その次に今鏡の六・四となるが、この数値は枕草子や大鏡とほぼ同数値である。それに比べると増鏡の四・六は、かなり低い値である。名詞の使用率についてはやはり源氏物語が一七・八と最も高くなっており、次いで落窪物語のとなつてゐる。今鏡は四・六で四番目の低さである。同じ歴史物語である大鏡の名詞の使用率は五・〇で、増鏡は三・八であるからほぼこの二作品の中間に位置する。動詞について見ると今鏡は一・六で、源氏物語に次いで高い数値を示

〈表 7. 語種別比較表 (延べ語数)〉

	土佐	竹取	更級	紫式部	蜻蛉	枕草子	源氏	大鏡	増鏡	今鏡
和語	3369 (96.4)	4864 (94.9)	6891 (95.1)	7732 (88.5)	21459 (95.8)	30245 (91.9)	198684 (95.6)	23902 (81.8)	29181 (84.3)	31528 (83.2)
漢語	103 (2.9)	220 (4.3)	295 (4.1)	852 (9.8)	778 (3.5)	2169 (6.6)	7116 (3.4)	4549 (15.6)	4192 (12.2)	4546 (12.0)
混種	24 (0.7)	40 (0.8)	57 (0.8)	153 (1.8)	161 (0.7)	492 (1.5)	2008 (1.0)	761 (2.6)	1325 (3.6)	1808 (4.8)
計	3496	5124	7243	8737	22398	32906	207808	29212	34608	37882

している大鏡や増鏡と比較してみてもほぼ二倍という値であるから、かなり高いといえよう。このように今鏡の動詞の使用率は高く、叙述が単純であるということが考えられる。

第四節 漢語・混種語に

ついて

今鏡には延べ語数で漢語が四六四六語、混種語で一八〇八語の語が使用されている。全体の比率から見ると、和語が八三・二%、漢語が一・二%、混種語が四・八%となつており和語が圧倒的に多い。他の作品と比較したのが表7である。漢語の比率が最も高いのは大鏡の一五・六%で、増鏡一二・二%の次に今鏡の一・二%となる。一〇%台を越えているのはこの三作品だけである。最も低いのは土佐日記の二・九%、次いで蜻蛉日記である。紫式部

〈表 8. 語種別比較表 (異なり語数)〉

	土佐	竹取	更級	紫	蜻蛉	枕	源氏	大鏡	増鏡	今鏡
和語	926 (94.1)	1202 (91.7)	1770 (90.8)	2104 (85.3)	3792 (91.1)	4415 (84.1)	9953 (87.1)	3259 (67.6)	5229 (61.9)	3656 (61.7)
漢語	44 (4.5)	88 (6.7)	146 (7.5)	227 (11.2)	236 (6.6)	641 (12.2)	1008 (8.8)	1330 (27.6)	1373 (20.1)	1379 (23.3)
混種	14 (1.4)	21 (1.6)	34 (1.7)	87 (3.5)	83 (2.3)	191 (3.6)	462 (4.0)	230 (4.8)	743 (9.9)	892 (15.0)
計	984	1311	1950	2468	3598	5247	11423	4819	7476	5927

日記が女流文学作品であるにもかかわらず九・八%と高い数値を示しているのは、作者の紫式部が漢文の知識に富んでいたためと思われる。次に混種語についてみると今鏡が四・八%と最も高い数値をだしており、次いで増鏡の三・六%となっている。二%を越える作品はやはり今鏡、増鏡、大鏡の三作品だけで、土佐日記、蜻蛉日記などは一%にも満たない。漢語・混種語の占める割合は大鏡、今鏡、増鏡の三作品が特に目立って大きくなっている。時代背景も一因しているようが、高い数値を示すのが鏡物三作品ということは、ここに歴史物語の側面を窺うことができ

次に異なり語数についてみていきたい。今鏡の異なり語数の割合は、和語六一・七%、漢語二三・三%、混種語一

〈表 9. 和語・漢語・混種語 語彙表 (異なり語数による)〉

	全 語 彙		和 語		漢 語		混 種 語	
名 詞	4144	69.91	1993	54.51	1295	93.91	856	95.96
動 詞	1299	21.92	1214	33.21	65	4.71	20	2.24
形 容 詞	218	3.68	204	5.58	1	0.07	13	1.46
形容動詞	118	1.99	105	2.87	10	0.73	3	0.34
そ の 他	148	2.50	140	3.83	8	0.58	0	0.00
計	5927	100.0	3656	100.0	1379	100.0	892	100.0

(左:異語数、右:%)

値を示している。また和語に比べて低い値である。このように歴史物語では漢語、混種語の占める割合が大きく、今鏡、増鏡においては混種語

五%となっている。これを他の作品と比較したのが表 8 であるが、ここでも今鏡の特徴を見る事が出来る。漢語において最も高い比率を示すのが大鏡の二七・六%、次いで今鏡の二三・三%である。延べ語数の場合と同様に二〇%を越えるのはこの二作品と増鏡だけである。土佐日記は四・五%、竹取物語は六・七%といづれも低い数値を示しており、紫式部日記、枕草子がわずかに一〇%を越えているのみである。混種語においては、高い数値を示すのが今鏡の一五%であり、一〇%を越えているのはこの作品だけである。他の作品は、増鏡が九・九%で一〇%に近い数値を示しているものの、あとの作品は大鏡も四・八%で低い数値を示している。

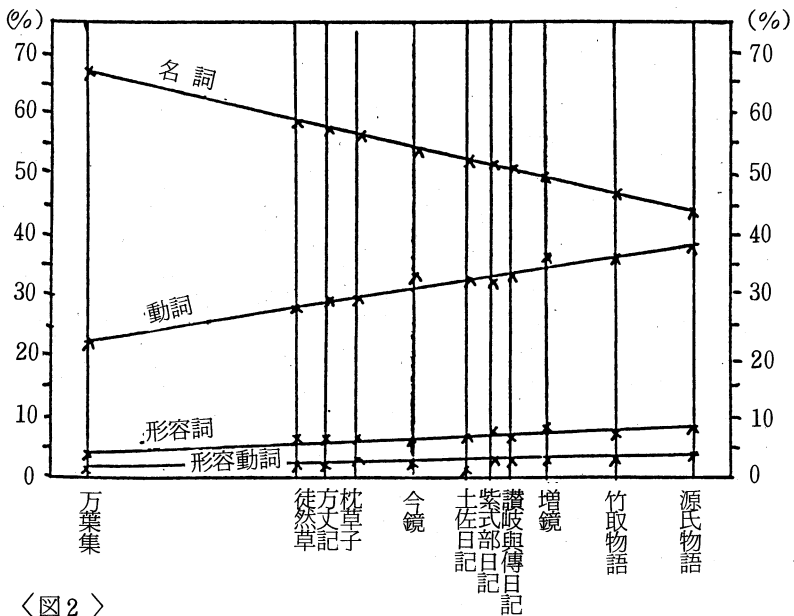
が、大鏡においては漢語がより多く用いられていることがわかる。

今度は、その漢語・混種語を品詞別にみていきたい(表9)漢語では異なり語数千三百七十九語のうち名詞が一九五語九三・九%で九割を越える使用となっており、次いで動詞の六五語で四・七%となり名詞に比べて非常に低い値を示している。混種語の場合も同様に名詞の比率が高く、全語数八九二語のうち八五六語とほとんどを名詞が占めていて九六%と高い数値を出している。このように漢語・混種語の使用は殆どが名詞である。

〈表10. 和語・漢語+混種語比較〉

	和語	%	漢+混	%
名詞	1993	54.51	2151	94.72
動詞	1214	33.21	85	3.74
形容詞	204	5.58	14	0.62
形容動詞	105	2.87	13	0.57
その他	140	3.83	8	0.35
計	3656	100.0	2271	100.0

和語と漢語・混種語の総計を比較してみると表10のようになるが、和語においては名詞は五四・五%と全体の半分以上を占めているものの、全語彙の場合を下回っており、漢語・混種語の占める割合が大きいことがわかる。動詞は和語だけの場合は三三%と高い率を示している。形容詞も和語のみの場合五・五八%と高い値を出している。このことから今鏡における名詞は漢語・混種語の占める割合が大変大きく半数以上を占めてい



〈図2〉

〈表11. 漢語・混種語 品詞別使用率〉

	名 詞	動 詞	形 容	形 動	その他	全 体
延べ語数	5966	231	26	101	30	6354
%	93.9	3.64	0.41	1.59	0.47	100.0
使用率	2.8	2.7	1.9	7.8	3.8	2.80

〈表12. 和語品詞別平均使用度数〉

	名 詞	動 詞	形 容	形 動	その他	全 体
延べ語数	12870	14782	1762	454	1660	31528
%	40.8	46.9	5.6	1.4	5.3	100.0
使用率	6.5	12.2	8.6	4.3	11.9	8.6

ることがわかる。ここで和語のみの場合にはどのような傾向があるのか見るために図1の相関表に組み込ませて見たのが図2である。これを見ると図1では万葉集グループの左側に位置していた今鏡が、名詞の比率が極端に低くなったため、随筆グループと日記グループの間に位置してしまいう結果となった。同じ歴史物語の増鏡も万葉集グループと随筆グループの中間に位置していたのが物語グループに入ってしまった。その他の作品では資料がなくなりはっきりしたことは言えないが、漢語・混種語の比率が低く一〇%にも満たないので和語のみの場合を考えてみても今鏡の位置はさほどかわらないであろう。このように今鏡では漢語及び混種語を除くと位置が変わってしまい、いかに漢語・混種語の使用が多いかがわかる。

次に漢語・混種語の使用率についてみてみたい。漢語・混種語を一つにまとめて表11に示しているが、形容動詞だけが七・八と高い数値を示し、その他の品詞は二〜四までに留まっている。つまり一つの語を何回も使用せず、一、二度しか使わない語が多いのである。形容動詞の数値が高いのは異なり語数が一四語と少ない中で「かやうなり」「さやうなり」の二語が四十九度、十九度と多用されているためで、その他の語をみるとやはり同様のことが言える。ついで和語の使用率を示したのが表12である。和語全体の使用率は八・六である。最も高い数値を示している。「その他」を除いて考えると、動詞の一・二・二で、次いで形容詞が八・六となっている。形容詞については表11では一・

九であるのでかなり高いということがわかる。名詞の場合も同様に六・五となり表11に比して高くなっている。これらのことから漢語・混種語では一回ないし二回使用の語が和語に比べて高いということが出来るであろう。

第二章 名詞の語彙

第一節 名詞について

今鏡における名詞は異なり語数四一四四語、延べ語数一八八三六語で使用率は四・六である。しかし一度しか用いられていない語は二四二四語で全体の約六割を占めている。今鏡では、「むすめ・みかど」「くらゐ・とうぐう・きさき」など宮廷生活を想像させる語が上位語に多くみられる。これらの語が今鏡の物語内容を如実に物語っていると見え、皇族についての叙述が多いということが窺える。

第二節 名詞における漢語・混種語

名詞においては漢語・混種語の占める割合が大きいということは前述のとおりだが、さらに異なり語数、延べ語数の使用度数の分布からみていきたい(表13、14)。この表から明らかにように漢語・混種語では使用度数が一回という語が多い。特に混種語においてはそのほとんどが一〜三十回使用の語である。漢語においても一〜五十回使用の語が占めていて使用度数が高くなるにつれ用例は減少する。漢語では一語で一〇九回使用されている「院」と「様」が最も多い。今鏡では名詞の異なり語数の比率が高かったが、その理由としては使用度数の少ない漢語・混種語が多いことが言えるであろう。では、その異なり語数で多くの比率

を示す漢語・混種語は、どのような関係の語が多いのか検討してみたい。漢語・混種語を、一人名及び官職、二天皇・院に関する語、三年月日、四仏教に関する語、五その他の語の五グループに分けて表15に示し、増鏡とも比較してみた。その他の項には地名、普通名詞など雑多な語が含まれており数も多くなった。一〜四の中で最も用例が多いのは人名及び官職に関する語で、異なり語数九百四となり漢語・混種語の約半数を占め、延べ語数は一九一二語で約三二%を占めている。増鏡においても、今鏡ほどではないが、やはり人名・官職に関する語が多い。また、天皇(皇室)に関する語は、異なり語数で六二五語、延べ語数で一二九九語となっている。このように人名や官職に関する語、天皇に関する語が多いのは登場人物が多く、素材が豊富であるということが考えられる。また、天皇に関する語で延べ語数が多いのは、「院」「東宮」などが多く用いられていることや、歴代の天皇について多くを語っていることから理解できる。年月日が多用されているのは増鏡においても同様であることから歴史物語の必然性からくるものであろう。

歴史物語において名詞の異なり語数の占める割合が大きいことの原因の一つは、漢語・混種語が高い率を占め、そのほとんどの語が使用度数の少ないものであることが考えられる。また、漢語・混種語では人名や官職などの登場人物に関する語が多く、それと同様に天皇についての語が多い。さらに、歴史を語るに必要な年月日が含まれて構成していることがわかった。

〈表13. 名詞異なり語数 使用度数表〉

	全 語 数	%	和 語	%	漢 語	%	混 種 語	%	漢 及 混 種 語	語 び 語	%
1	2424	409.0	1041	175.6	760	128.2	623	105.1	1383	233.3	
2	655	110.5	329	55.5	204	34.4	122	20.6	326	55.0	
3	261	44.0	137	23.1	89	15.0	35	5.9	124	20.9	
4	155	26.2	84	14.2	52	8.8	19	3.2	71	12.0	
5	110	18.6	63	10.6	34	5.7	13	2.2	47	7.9	
6	79	13.3	40	5.9	30	5.1	9	1.5	39	6.6	
7	58	9.8	35	4.1	18	3.0	5	0.8	23	3.9	
8	42	7.1	24	4.1	13	2.2	5	0.8	18	3.0	
9	43	7.3	24	2.5	15	2.5	4	0.7	19	3.2	
10	31	5.2	15	16.4	12	2.0	4	0.7	16	2.7	
11~ 20	153	25.8	97	5.4	44	7.4	12	2.0	56	9.5	
21~ 30	42	7.0	32	2.7	8	1.4	2	0.3	10	1.7	
31~ 40	21	3.5	16	2.7	5	0.8	0	0	5	0.8	
41~ 50	22	3.7	16	2.2	5	0.8	1	0.2	6	1.0	
51~ 60	18	3.0	13	0.7	3	0.5	2	0.3	5	0.8	
61~ 70	5	0.8	4	0.3	1	0.2	0	0	1	0.2	
71~ 80	2	0.3	2	0	0	0	0	0	0	0	
81~ 90	0	0	0	0.3	0	0	0	0	0	0	
91~100	2	0.3	2	2.0	0	0	0	0	0	0	
101~200	14	2.4	12	0.5	2	0.3	0	0	2	0.3	
201~300	3	0.5	3	0.3	0	0	0	0	0	0	
301~400	2	0.3	2	0.2	0	0	0	0	0	0	
401~500	1	0.2	1	0.2	0	0	0	0	0	0	
501~	1	0.2	1	0.2	0	0	0	0	0	0	
計	4144	699.2	1993	336.3	1295	218.5	856	144.4	2151	362.9	

〈表14. 名詞異なり語数 使用度数表〉

	全 語 数	%	和 語	%	漢 語	%	混 種 語	%	漢 語 及 混 種 語	%
1	2424	64.0	1041	27.5	760	20.1	623	16.4	1383	36.5
2	1310	34.6	658	17.4	408	10.8	244	6.4	652	17.2
3	783	20.7	411	10.8	267	7.0	105	2.8	372	9.8
4	620	16.4	336	8.9	208	5.5	76	2.0	656	17.3
5	550	14.5	315	8.3	170	4.5	65	1.7	235	6.2
6	474	12.5	240	6.3	180	4.7	54	1.4	234	6.2
7	406	10.7	245	6.5	126	3.3	35	0.9	161	4.2
8	336	8.9	192	5.1	104	2.7	40	1.1	144	3.8
9	387	10.2	216	5.7	135	3.6	36	0.9	171	4.5
10	310	8.2	310	8.2	120	3.2	40	1.1	160	4.2
11~ 20	2174	57.4	1373	36.2	632	16.7	169	4.5	961	25.4
21~ 30	1070	28.2	829	21.9	190	5.0	51	1.4	241	6.4
31~ 40	734	19.4	564	14.9	170	4.5	0	0	170	4.5
41~ 50	1019	26.9	739	19.5	234	6.2	46	1.2	280	7.4
51~ 60	945	24.9	674	17.8	164	4.3	107	2.8	271	7.2
61~ 70	322	8.5	261	6.9	61	1.6	0	0	61	1.6
71~ 80	153	4.0	153	4.0	0	0	0	0	0	0
81~ 90	82	2.2	82	2.2	0	0	0	0	0	0
91~100	195	5.2	195	5.2	0	0	0	0	0	0
101~200	2001	52.8	1655	43.7	0	0	0	0	0	0
201~300	647	17.1	674	17.8	346	9.1	0	0	346	9.1
301~400	751	19.8	751	19.8	0	0	0	0	0	0
401~500	463	12.2	463	12.2	0	0	0	0	0	0
501~	680	17.9	680	17.9	0	0	0	0	0	0
計	18336	497.2	12870	339.7	4275	112.8	1691	44.6	5966	157.5

〈表15. 名詞分類 [漢語・混種語]〉

		人名・ 官 職	天 皇	年月日	仏 教	その他	計
今	異語数	904	154	173	121	799	2151
	%	42.0	7.2	8.0	5.6	37.2	100
鏡	延語数	1912	868	587	286	2308	5961
	%	32.1	14.6	9.9	4.8	38.7	100
増	異語数	625	206	297	208	780	2116
	%	29.5	9.7	14.0	9.8	36.9	100
鏡	延語数	1299	1150	424	351	1854	5078
	%	25.6	22.6	8.3	6.9	36.5	100

第三章 動詞の語彙及び語法

第一節 語数について

今鏡に使用されている動詞の数は異なり語数一二九九語、延べ語数一五〇一三語である(補助動詞を含む)。これらの数値を他の作品と比較したのが表16である。今鏡の異なり語数の比率は二一・七%で最も低くなっており、次に増鏡の二四%、大鏡の二五・八%と続いている。延べ語数の比では最も低い値を示すのが紫式部日記の二八・二%、次いで大鏡の二九・六%となる。今鏡は三九・六%で落窪物語の次に高い数値となっている。大鏡については、異なり語数、延べ語数共に低い数値を出しているので単純な判断、叙述の態度が察せられる。今鏡においては異なり語数において最も低い比率を出しながら、延べ語数においては最も高い数値を示している。故に、今鏡は、少ない種類の語彙を使って単純な判断をし、叙述の方法に重きをおかず、出来事を連ねた作品であるという事が言える。また語彙量の比較では今鏡を百として他の作品の比率を示した。異なり語数では源氏物語は三九二・四と今鏡の約四倍の語数を持ち、蜻蛉日記は一〇五・八、落窪物語は一〇一・七と今鏡とほぼ同じ語数を持っている。延べ語数についてはやはり源氏物語が四五五・八と高く、今鏡の約四倍の大きさを持つことがわかる。また、万葉集が一一四・四で今鏡とほぼ同じ語数を持つが異なり語数では高い率を示している。

〈表16. 動詞異なり語数及び延べ語数比較表〉

	今鏡	増鏡	大鏡	万葉	土佐	竹取	枕草	紫	方丈	更級	徒然	蜻蛉	源氏	落窪
異動詞の数	1299	1767	1242	2045	300	528	1819	837	335	693	1247	1374	5097	1321
比率(%)	21.7	24.0	25.8	31.4	30.5	40.3	34.7	33.9	29.2	35.5	29.4	38.2	44.6	37.8
今鏡との比	100.0	136.0	95.6	157.4	23.1	40.7	140.0	64.4	25.8	53.4	96.0	105.8	392.4	101.7
延動詞の数	15013	10752	8635	17181	1207	2043	10776	2460	751	2495	5562	8542	68427	11704
比率(%)	39.6	31.1	29.6	34.3	34.5	39.9	32.7	28.2	29.7	34.4	32.5	38.1	32.9	43.0
今鏡との比	100.0	71.6	57.5	114.4	8.0	13.6	71.8	16.4	5.0	16.6	37.1	56.9	455.8	78.0

第二節 (省略)

第三節 使用度数と主要語彙

今鏡における動詞の使用率は一一・五六であるが、実際には使用回数にはばらつきが見られることが予想される。そこで使用度数の分布を異なり語数と延べ語数から考察し、どのような語が多く使われているかを調べてみた(表17、18)。表17を見ると一度しか使用されていない語は六七八語で最も高い数値を示している。しかし表18を見ると、最も高い数値をしめしているのは二〇〇回以上使用されている語で八一八三語となっており、そのうち約七割に当たる五六二四語が四段活用に使われていることがわかる。二〇〇回以上使われている語は表17をみると一二語しかなく、表17の数値はそれに比べてかなり高く使用度数の多さを物語っている。下二段は一語で四四三語も使用されていて、

サ変・ラ変でも二語でそれぞれ一〇九九語、一〇一七語も使用されている。これは下二段においては「きうゆ」「サ変」においては「おはす」「す」「ラ変では「あり」「はべり」が多くの使用度数を持つているからである。さらにそれぞれの累計及び比率から詳しくみると異なり語数では全体の五二・二%を占めているのに対して延べ語数では四・五%しか占めていない。また使用度数一〇回までは異なり語数八八・三%とほとんどを占めているのが、延べ語数ではわずか一六・五%となる。五〇回までの使用の語は異なり語数ではほとんどを占めているが、延べ語数では三二・七%と三割しか満たない。五一回以上使用の語は三五語しかなく、延べ語数では全体の約六割を占めている。

動詞の主要語彙としては「まうす」「よむ」「たてまつる」などの謙讓語が多い。それは歴代の天皇・皇家に関する

〈表17. 異なり語数使用度数表〉

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11 20	21 30	31 40	41 50	51 100	101 200	201	計
四段	380	127	42	33	25	10	15	12	9	8	48	14	8	3	9	6	7	756
上一	13	4	1		1						2	2				1		24
上二	13	1		1	1	1					2	1	1					21
下二	207	61	30	11	14	17	3	4	3	1	16	11		1	7		1	387
カ変	8	2									1	1						12
サ変	52	11	6	2	3	2	3			1	1	1	1					85
ナ変	2																	2
ラ変	3	2	1	1								2	1					12
計	678	208	80	48	44	30	21	16	12	10	70	32	11	4	16	7	12	1299
累計	678	886	966	1014	1058	1088	1109	1125	1137	1147	1217	1249	1260	1264	1280	1287	1299	
%	52.2	68.2	74.4	78.1	81.5	83.7	85.4	86.6	87.5	88.3	93.7	96.2	97.0	97.3	98.5	99.1	100	

〈表18. 延べ語数使用度数表〉

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11 20	21 30	31 40	41 50	51 100	101 200	201	計
四段	380	254	126	132	125	60	105	96	81	80	689	346	281	130	631	826	5624	9966
上一	13	8	3		5						35	42				115		221
上二	13	2		4	5	6					27	21	31					109
下二	207	122	90	44	70	102	21	32	27	10	219	280		45	503		443	2215
カ変	8	4									11	26						49
サ変	52	22	18	8	15	12	21			10	15	23	36					1331
ナ変	2																	2
ラ変	3	4	3	4								52	37					1120
計	678	416	240	192	220	180	147	128	108	100	996	790	385	175	1134	941	8183	15013
累計	678	1094	1334	1526	1746	1926	2073	2201	2309	2409	3405	4194	4579	4754	5888	6829	15013	
%	4.5	7.3	8.9	10.2	11.6	12.8	13.8	14.7	15.4	16.5	22.7	27.9	30.5	31.7	39.2	45.5	100	

る記述が多いためだと考えられ、「よむ」に関して宮中の歌のやりとりなどが行われている為だろうと推察される。

第四節 漢語・混種語について

動詞において漢語および混種語の占める割合は異なり語数で八五語、動詞全体の六・九%を占め、延べ語数は二〇六語で全体の一・七%を占めている。動詞において漢語・混種語の占める割合は非常に少ないが、その異なり語数を活用形別に比較したのが表19である。漢語及び混種語は四段、下二段、サ変の三活用にしか見られず、しかも四段、下二段共に漢語は見られず、混種語のみがそれぞれ六語で〇・八%、三語で〇・八%あるだけである。サ変について見ると漢語が六五語で七六・五%を占め、混種語が一一語で一・九%を占めて漢語・混種語を合わせると八九・四%と約九割を占める数値となり、四段・下二段の場合と逆の結果となった。延べ語数については表二十に示したが、ここでも四段・下二段活用の占める割合は小さく、四段では混種語が九語で〇・一%、下二段では、混種語が五語で〇・三%で異なり語数と同様に一%にも満たない。サ変では異なり語数において、漢語・混種語合わせて九割を占めていたが、延べ語数の場合は漢語が二〇五語で一五・四%、混種語が一二語で〇・九%となり合わせて一六・三%で著しく低い値を示した。しかし四段・下二段に比べると高い数値を示していることがわかる。このように動詞においては漢語の使用がサ変において最も高い。特に異なり語数

〈表19. 異なり語数活用種類別比較表〉

	和語	漢語	混種	計
四段	750		6	756
%	99.2		0.8	100.
下二	384		3	387
%	99.2		0.8	100.
サ変	9	65	11	85
%	10.6	76.5	12.9	100.
計	1143	65	20	1228
%	93.1	5.3	1.6	100.

〈表20. 延べ語数活用種類別比較表〉

	和語	漢語	混種	計
四段	9957		9	9966
%	99.9		0.1	100.
下二	2210		5	2215
%	99.7		0.3	100.
サ変	1114	205	12	1331
%	83.7	15.4	0.9	100.
計	13279	205	26	13512
%	98.3	1.5	0.2	100.

〈表21. 漢語・混種語異なり語数使用度数表〉

() 内は漢語

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計
四段	4	1	1									6
下二	2		1									3
サ変	47	11	6	2	1	2	3			1	3	76
	(37)	(10)	(6)	(2)	(1)	(2)	(3)			(1)	(3)	(65)
計	53	12	8	2	1	2	3			1	3	85
	(37)	(10)	(6)	(2)	(1)	(2)	(3)			(1)	(3)	(65)
累計	53	65	73	75	76	78	81	81	81	82	85	
	(37)	(47)	(53)	(55)	(56)	(58)	(61)	(61)	(61)	(62)	(65)	
%	62.3	76.5	85.9	88.2	89.4	91.8	95.3	95.3	95.3	96.5	100	

〈表22. 漢語・混種語延べ語数使用度数表〉

() 内は漢語

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計
四段	4	2	3									9
下二	2		3									5
サ変	47	22	18	8	5	12	21			10	74	217
	(37)	(20)	(18)	(8)	(5)	(12)	(21)			(10)	(74)	(205)
計	53	24	24	8	5	12	21			10	74	231
	(37)	(20)	(18)	(8)	(5)	(12)	(21)			(10)	(74)	(205)
累計	53	77	101	109	114	126	147	147	147	157	231	
	(37)	(57)	(75)	(83)	(88)	(100)	(121)	(121)	(121)	(131)	(205)	
%	22.9	33.3	43.7	47.2	49.4	54.6	63.6	63.6	63.6	68.0	100	

ではその比率が高く一語使用の漢語が多いことが推察される。

では、分布状態について見てみると(表21、22)、表21では一回使用の語は五三語で全体の六割を占めている。しかし表22ではその比率はわずかに二二・九%と低くなっている。延べ語数で最も数値が高いのは一一〇〇回使用の七四語で異なり語数でわずかに三回使用の語である。これは「御覽ず」が三六回、「具す」が二三回と高い使用回数を持っているためである。このように漢語・混種語では一回使用の語が殆どを占めている。

第四章 その他の品詞 (省略)

結論

以上、今鏡を主として語彙から考察し、重ねて漢語、混種語との関連から作品の個性、執筆態度及び傾向を探ってみた。まず、異なり語数と延べ語数から文章の性格をみてきたが、何よりも異なり語数で名詞の比率が高く特異な位置に属し、それは多鏡・増鏡とも共通性が高く、歴史物語の特徴が得られた。名詞の比率が高い理由の一つとして漢語・混種語が多いということ、そしてその多くが一回使用の語であると言いうことがあげられる。使われている名詞も固有名詞が多く、名詞全体の五〇%以上を占め、今鏡は歴史物語の必然性として素材が多いということがいえる。また、それに比べて動詞の占める割合は低く、叙述態度は簡略で要約的である。

これらの事は歴史物語としての流れの中で起こった

事件、事実をありのまま記すという必然性から生まれたものであり、普通の物語のように叙述に精細を極めることなく、事件描写を中心としたためだと思われる。

また、大鏡・増鏡と多く類似した数値が得られたが、この点では歴史物語として特別な位置付けが出来るよう。

註1 増鏡は中島成子氏の「増鏡の語彙の一考察」より、

その他は中島達夫氏の「古典対象語い表」(笠間書院)より借用した。

註2 「基本語彙に関する二、三の研究」(国語学第二十四輯)

註3 註2に同じ。45、46ページより抜粋

註4 中島成子氏「増鏡の語彙の一考察」(熊本女子大学54年度卒論)より借用

註5 落窪物語の数字は「落窪物語」の語彙と文体についての「一考察」(国文学攷第五十五号)より借用

本論は、榊原邦彦他編「今鏡本文及び総索引」に拠り調査した。